武の高み、頂を求めて

案蛇胤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
武の高み、頂を求めて

【Ｎコード】
Ｎ１４５３Ｐ

【作者名】
案蛇胤

【あらすじ】
貂蝉と共に日々を歩むことを決めた呂布。
しかし、元とは似て非なる世界に飛ばされ、彼は再びその武を振るう。

奉先、漢に出逢うのこと（前書き）

初投稿です。
携帯で投稿してる上、システムというか、勝手も良く分からないです。
稚拙な部分もあると思いますがよろしくです。

奉先、漢に出逢うのこと

――――彼を表す言葉は幾つもある。

三国無双。
鬼神。
飛将軍。
人中の呂布。

その何れも、彼の燻る心を燃え上がらせる要素には成り得なかった。

何故なら――――彼が欲した物は世の評価などではなく、ただひたすらに強者と戦うことであったから。
だから彼は戦った。
己の主であった男を殺し、愚直に、強者の気配を追って戦い続けた。

そして、彼の側にいた女性が一人いた。
傾国の美女とすら称される、貂蝉である。
彼女は、殺された父の無念を晴らすため、最強の武を誇る呂布を利用しようと考えたのだ。
呂布は、貂蝉に惹かれていた為か、彼女の望みはその武を以て叶えてきた。

ここまで言えば、愛への盲目故に、呂布は貂蝉に利用され続けたように聞こえる。

だが――――呂布は気付いていた。
彼女が、元より自身を利用するために近付いていたことを。

彼女もまた、自身の野望を知って尚も武を振るう呂布に惹かれた。
貂蝉は、この方が側にいるなら、復讐などもう良いのではないかと考えた。
呂布も同じように、貂蝉と共に在れるならと、その武を収めた。
そして……貂蝉の目的は達せられないままだったが、二人は穏やかな日々を過ごそうと誓った……。

この物語は、本来ならばここで終わりを迎える。
しかし皮肉にも、平行世界――パラレルワールドと言うべきか――にいる彼の愛した女性、貂蝉によって彼は再び戦乱に身を投じることとなる。

今度は、無意味な武ではなく――――何かを護れる武であるように、と自身に誓いながら。

――――――――――――――――――――――――――――

「――やはり、戦はそう簡単には無くならんか」

「ですな。特に大きかった勢力も、力をなくし、周辺からは賊も出ているようです」

俺の次に強いであろう張遼がそう言った。

張遼は陳宮程ではないが頭が良い。
武に於いても知に於いても、俺は張遼を頼りにしていた。

「ふん、賊など、この俺が片付けてやる。俺や貂蝉、そしてお前たちが穏やかに過ごすためにも、な」

「……呂布殿、変わられましたな」

張遼の言葉に、目を閉じる。
数秒の沈黙の後に、俺は口を開いた。

「そうかも知れんな。俺は戦しか知らなかった。だが――このような日々の中にも、確かな形を成した物がある。……貂蝉と共にいる内に、妙な考え方を刷り込まれたらしい」

少しだけ皮肉気な言い方をして、俺と張遼の二人は笑い合った。

「さて、行くとするか。最も近い賊の根城はどこだ？」

「呂布殿、一人で行くつもりですかな？」

張遼の問いに、俺は片手に持った十字戟――無双方天戟――を見せて答える。

「心配はいらないでしょうが、危険な時は我らも出陣致しますぞ」

「――――心配いらん。俺は賊如きには負けん」

「ふっ、どうやらそのようだ」

俺の背に何かを感じたのか、張遼はそれ以上追求しなかった。

「北へ四刻程にある砦です」

「助かる」

もう、それ以降の会話はなかった。

――――――――――――――――――――

愛馬である赤兎に跨ったとき、後ろから声が掛かった。

「奉先様」

「…貂蝉か」

「必ず、必ずお戻り下さい。私は――――お待ちしております」

……元よりそのつもりはないが、余計に死ぬわけにはいかなくなったな。

「当然だ。待っていろ、貂蝉！」

それだけ言って、俺は赤兎を走らせた。

「……御武運を」

最後の言葉は、やけに耳に残った。

赤兎を走らせてまだ一刻と経っていない頃だろうか。
目の前に、特徴的な男が現れた。

「…なんだ、お前は」

殺気を放ち、戟を男に向ける。
……やけに露出が多い。

「うっふん、そんなに怖い顔し、な、い、の☆」

すぐに殺したくなった。
だが、こいつは何か俺に用がありそうだ。
今にも振るいそうな腕を必死に抑え込む。

「アナタ、呂奉先よねん？」

「…そうだが」

当然、呂布は俺ただ一人だ。
……こいつは何を言っているんだ。

「頼みがあるのよ。あなたに、外史の世界を救って欲しいの」
外史？
聞き慣れない言葉に首を捻る。

「外史っていうのは、ここと違う平行世界。つまり、あの時もし

もこうだったら、という部分から無限に分岐した世界なの。まぁ他にも、人々の理想が内包されてるけどね」

「……」

もしもこうだったら？

理想？

話について行けない。

一体どういうことなんだ。

「もしもについては…そうね。今ここが、アナタが天下を掴んだ世界なら、同時に劉備が、もしくは曹操が、もしくは孫堅が天下を掴む世界がある。分かる？」

「なるほど」

考えたくもないが、俺が貂蝉と出会わなかったら、といった世界があるかも知れないというわけか。

「で、本題。とある外史に、ワタシのご主人様がいるわ。ご主人様は魏にいるんだけれど、彼は三国の時代よりも遥か未来から来た人物。つまり、歴史を変えてしまうかも知れないのよ」

「ふむ」

「ご主人様が歴史を変えると、世界から敵性と判断されて、消滅する。ワタシはご主人様をそんな目に会わせたくないのよ！」

その手助けに俺、か。

なるほど、なかなか良い人選だ。

「良いだろう。だが、城には貂蝉や張遼がいる。奴らにもそれを伝えたい」

「伝えることは出来るけど、連れていくことは出来ないわよ？」

「構わん。あくまで俺が暫く離れることを伝えたいだけだ」

「そう。じゃあ、アナタを外史に飛ばした後に、ワタシからアナタの仲間に伝えておくわ」

不気味な男だが、悪い奴ではなさそうだからな…恐らく、信用しても良いだろう。

「頼んだ。……お前の名前は？」

「うふ、ワタシ？　貂蝉っていうの☆　そ、れ、じゃ、あ、飛ばすわね。チチンプイプイー！」

ワケの分からん言葉と共に、俺の視界は暗転した。

……貂蝉？

奉先、漢に出逢うのこと（後書き）

第一話…というか、プロローグみたいな物でしたが、如何でしたか？
華雄さんや春蘭ほど猪でもないでしょうから…、呂布もそこまで馬鹿ではないはずです。
まぁ、元の貂蝉と漢の貂蝉の違いに激しく戸惑いはするんでしょうけど。
では、また次の話でお会いしましょう。

奉先、黄巾を蹴散らすのこと（前書き）

二話目です。
矛盾点、誤字・脱字あれば遠慮なく感想の方にお書き下さい。

今回は後書きに呂布と赤兎馬の強さ？というか能力を載せてありますので、一応はご確認下さいな。

奉先、黄巾を蹴散らすのこと

暗転していた視界に、光が差し込んだ。

「――――ん…」

目を開くと、雲一つない青空。
その向こうには、燦々と陽の光が照らされていた。
俺はここに倒れていたらしい。
むくりと身体を起き上がらせる。

「……く、アレがもしもの世界の貂蝉だと？」

しかし、そんな空とは真逆に、俺の内心は暗雲が立ち込めていた。
アレが最後に放った言葉。
信じたくはないが、嘘を吐いているような雰囲気ではなかった。
……く。

ヒヒン、と小さく鳴く声。
傍らには、愛馬である赤兎が控えていた。
どうやら、こいつも共に飛ばされたようだ。
俺一人でも雑魚を蹴散らすことなど造作もないが、遠出をするとなると距離がある。
その場合は、こいつの力を借りることになる。
だからこそ、こうして近くに居てくれるのは有り難かった。

「さて、行くか」

近くに落ちていた自分の武器を手に持つ。

見たところ、傷が付いたような形跡はない。
それを確認し、俺は赤兎に跨った。

「ハッ！」

俺の蹴りと同時に、赤兎は風となった。

――――――――――――――――――――――――

暫く走らせると、遠目にかなりの人数が見える。
見れば、全員が黄色い布を巻いていた。
……黄巾賊か。
数からして、残党と呼べるものではあるまい。
…どうやら本当に外史なる世界に来たようだ。
先までは、俺と赤兎としかいなかったからな、確認など出来なかった。
だが、これで確信も持てた。
後は、この武を振るうのみ。

見ると、軽い丘の形になっているようだ。
ならば、赤兎を跳躍させるとしよう。

「行け、赤兎――――」

土を蹴り、赤兎は宙を舞う。

眼下に蔓延る雑魚共は、大口を開けて俺を見上げていた。

大きな音を立て、大地に降り立つ。
そして名乗る。
今までも名乗ってきた名を。
これからも名乗り続けるであろう、その名を。

「俺は呂布。呂奉先」

天下の飛将軍とは、俺のことだ――――！！
軽く振るった戟は雑魚を二十は吹き飛ばした。

「所詮は賊か、雑魚が」

俺は赤兎から降り、大きく戟を振るう。
その度に悲鳴が上がり、血飛沫が舞う。
返り血が幾度となく俺に降りかかるが、全く気にも留めない。

「少し本気を出すか」

先ほど以上に攻撃の幅を広げ、戟は四方八方問わず雑魚を血祭りに上げていく。
時には戟を二つに分けて斬りつけ、時には手元に戻るように回転させ投げつけたりもした。
そうして雑魚狩りを続けていると、後方から男の声が聞こえた。

「お前だな！　呂布と名乗ったのは」

「そうだ」

周りの雑魚を斬ることを止めずに返す。

「はん、適当なことをほざきやがって！　おれは何儀。てめえのような偽者野郎はおれがぶっ殺してやる！　一騎打ちだ！」

「……良いだろう」

この程度の雑魚には負けるつもりはない。
すぐに終わらせるとしよう。

「おらぁ！」

何儀と名乗った雑魚は槍を俺に向けて突き出した。
遅い。
最小限の動きで避け、槍を脇で固める。
そのまま左手で掴み引っ張った。

「う、うわぁ！」

槍を強く握っていた何儀は槍と一緒に俺に向かって飛んでくる。
話にならん。
飛んでいる何儀の腹を斬りつけ、俺は一騎打ちを終えた。

「敵将、討ち取ったぞ！」

その言葉を言い終わった直後に、背後から迫っていた矢三本を弾き落とす。
すぐに終わらせたとはいえ、一騎打ちの場に無粋な真似をする。

片付けてやろう。

――――――――――――――――――――――――

程なくして、ここの黄巾党は全滅した。
何らかの部隊だったのだろうが、俺の敵ではなかった。
俺も、傍らの赤兎も無傷だ。
さて、次は街を見付けねばな。

「この世界の俺にも会ってみたい」

何儀は俺を「偽者」と呼んでいた。
つまり、この世界での本物がいるはずだ。
目指すは洛陽。
俺の、裏切りの地だ。

奉先、黄巾を蹴散らすのこと（後書き）

この呂布については、ゲームで言えばレベルは最大の５０。
武器は、本来５では持てない筈なんですけども、一応「無双方天戟」
通常、力、速度の良いとこ取りと思って下さい。
属性は氷です。
スキルは
『一閃』
『精霊印』
『連舞心』
『真乱舞』
で、赤兎馬なんですけども。
名前はまんま赤兎。
当然、森羅万象を収め、神々しい気を放っています。
能力値は全部５００。
属性は氷でスキルは、防矢、無双増加、連舞維持。
そして最後は赤兎魂なんですけど…
『突破脚』
『猛攻脚』
『飛翔脚』
『的盧魂』
『絶影魂』
これら全部の能力を持ってると考えていいです。
せっかくの最強タグなんで、本人も馬も馬鹿みたいに強くしておこうかなと。

奉先、太守に出逢うのこと（前書き）

第三話です。
前回よりも描写にこだわってみました。
矛盾点などあれば前回同様、感想などでお書き下さい。

奉先、太守に出逢うのこと

馬を走らせている内に、大きな街が見えてきた。
――洛陽だ。
城の外観等から察するに、今まで見てきた物とは大差はない。
別世界と言っても、本質的な部分は変わっていないということか。

「考えても仕方在るまい」

誰に言うでもなく、そう一言だけ漏らすと洛陽に向かって更に速度を上げた。

門の直前で、赤兎から降りる。
街の中まで赤兎に乗るわけにもいかない。仕方なく引いて歩く。
恐らく門番だろうか。俺の下へ近付いてきた。
心なしか、動揺しているように感じる。

「貴様、何者だ！」

剣を向けられる。
以前の俺ならば、邪魔だと斬って捨てたのだろう。
だが、今の俺はそれほど馬鹿ではない。
人間らしく、口を使わせて貰うとしよう。

「――俺は呂丁（りょてい）。ここの太守である董卓に仕官させてもらう為に来た」

呂布という同じ名を持つ者が現れれば間違いなく混乱が生じるだろ

う。
それを避ける為、移動の間に偽名を考えておいたのだ。
だが、流石に呂の姓までは偽ろうとは思わなかった。
これでも、少しは自分の名に愛着はあるのでな。
もしも『ここの』董卓が信用に足る人物なら…俺の正体を教えよう。
だが、以前のような豚ならば、斬り捨てるまでだ。

「なるほど、入れ」

思案している間に、門番は道を開けた。
どうやら疑われることはなかったようだ。
遠慮なく通らせて貰おう。

「いい馬だな、見惚れたよ」

……悪い気はしない。
俺は口の端を吊り上げて、一言返した。

「当然だ」

それだけの会話を交わして、門を潜る。
こうして、俺は洛陽入りを果たした。

―――――――――――――――――――――

「ほう…」

洛陽に入って、俺は思わず感嘆の声を漏らした。
数多く開かれ、賑わう店。
行き交う人々。
道の端々で笑い合う子供。
――とてもじゃないが、前の世界では考えられなかった光景だ。

「……ここは本当に洛陽か？」

つい疑問を口に出してしまう。
…だが、先ほどの門番との会話もある。
ここの太守は董卓。
つまり、洛陽なのだ。……この世界での董卓は善政を働いているのか。目の前の光景は、暴政を働いていた豚の街とは違う。
俺は、まだ見ぬ董卓の評価を上げた。
――そんな折に、やけに大きな声が耳についた。

「…ん？」

声の方に目を向けると、何やら騒ぎが起きている。
何が起きているのかは分からないが、野次馬の数からして、それなりに大きな事柄なのだろう。
街に入って早々面倒事か。
俺は呆れながらも、赤兎に待つよう指示して騒ぎの中心へ足を向けた。

人混みを掻き分けると、中心には短剣を持った男と、恐らく人質だろう。その男に捕まっている少女が一人。

「くっ……あんた、月を放しなさいよ！」
眼鏡の少女が男に大声を張り上げる。
しかし、何故か男は逆に怒り狂い、奇声を上げた。
「うるっせぇやぁぁぁぁ！！　早く金と馬を用意しぶるぁぁぁぁぁぁぁぁぐげらっぺぇぇぇぇ！！！」
こいつはまともではないと判断し、懐にしまっておいた弓を取り出す。
無双方天戟と違い、こちらは良い物ではないが、殺傷能力は十分だ。
幸い、男はこちらに背を向けている。
しかも、あの場所から一歩も動かない。良い的だ。
何よりも、短剣を首に当てもせずに腕を上げっぱなしなのは愚の骨頂。
「くっ…。――――！」
眼鏡の少女が俺に気付いたらしい。
男もその視線の先――俺に目を向ける……が。
「遅い」
射った矢は正確に振り向いた男の眉間を貫いた。
短剣は地面に落ち、男も倒れた。
暫しの沈黙。
最初に破ったのは眼鏡の少女だ。
「――月！」

「え、詠ちゃん…！」

月と呼ばれた、人質だった少女が、眼鏡の少女――こちらは詠と呼んでいた――と抱き合う。
予想通り、友人関係だったようだ。
騒ぎは収まったが、男を射ったのは俺だ。
このまま知らん顔で離れるわけにも行くまい。
二人の少女に近づく。

「無事か？」

声をかけると、詠という少女が、月という少女を庇うように警戒する。
……ふむ、素性も分からない男相手では安心出来ないか。

「……あんたは誰」

「俺は呂丁。お前たちに危害を加えるつもりはない」

「……そう。助けて貰ったのには感謝するわ」

言葉遣いはアレだが、礼儀を知らないわけじゃなさそうだ。
服装を見るに、良い所の令嬢と言ったところか？

「詠ちゃん。この人が助けてくれたの？」

「え、えぇ」

もう一人の少女が尋ねる。
背を向けていたのだから、顔が分からないのも当然か。

「助けていただき、ありがとうございました。私は董卓、字を仲穎。真名は月と言います」

「ち、ちょっと月！？」

……待て。

「……お、お前が董卓なのか？　ここの太守の！？」

「…？　はい」

「ちょっと！　あんた何なのよ、月に対してその態度は！」

……いやいや、待て待て。

貂蝉が美しさの欠片もない筋肉達磨だったことから普通じゃないとは思っていたが……。

まさか、こんな虫も殺せなさそうな少女が董卓だとは。

つまり、こっちの眼鏡の少女も董卓の将なのか…？

考えたくはないが、俺も含め、他の武将も女になっているのかもしれない……。

もしかして俺は、とんでもない世界に来てしまったというのか…？

奉先、太守に出逢うのこと（後書き）

呂布の軽い追加設定について。
本当に信用出来る者以外は偽名として
姓：呂
名：丁
字：奉聖（ほうせい）
と名乗らせることにしています。

あと、弓を使いましたね。
無双５では全く使いませんでしたが、一応呂布は弓の名手でもあった、という話から使わせちゃいました。
戟を投げさせて首ちょんぱでも良かったんですけど、月ちゃんにそんなスプラッタは見せたくなかったんで。

……呂布、丸くなりすぎじゃね？
と感じないこともないですが、あんまり気にしないでください。
自分で書いてて、こいつ呂布か？とか思ったりしますが気にしちゃ負けなんです、ハイ。

ではまた次回。

奉聖（仮）、顔を合わせるのこと（前書き）

今回、前話までと比べて長くなりました。
九時から携帯カチカチやってようやく書き上げ。
パソコンだったらもうちょっと楽なのかなー。

では、第四話です、どうぞ。

奉聖（仮）、顔を合わせるのこと

調練場の近くの広場。
目の前には、胸にさらしを巻いた槍の女、霞。
それと…赤髪の、方天画戟を持った少女――恋――がいた。
……あの赤髪の少女は“俺”だ。
俺たちは向かい合い、全員が武器を持っている。
つまりは、手合わせだ。
…この二人と。

「よっしゃ！　まずはウチからや！」

「……ん」

――どうしてこうなったんだ…。

――――――――――――――――――――――――

「じゃあ、呂丁さんは仕官する為に来てくれたんですね！」

「そういうことだ」

騒ぎも収まり、野次馬も散った頃、後ろに待たせていた赤兎を連れ

事情を話す。
董卓…月は、俺が仕官すると聞き、顔を綻ばせる。
いい笑顔だ。
豚の下卑た笑いとは比べものにならん。
背後から感じる視線は、この際気にしないことにする。
視線の正体は眼鏡の少女――賈駆だ。
字を文和、真名を詠(えい)と名乗った。
ここで、先ほどから気になっていた疑問を口にする。

「そう言えば、姓、名、字、の三つ以外にも、真名というのを名乗っていたが、それはどういうものなんだ？」

「えっ！　呂丁さん、真名を知らないんですか？」

「ああ、俺の生まれ育った場所にそんな習慣はなかった」

もしかしたらこの世界に於いては、真名とは当たり前の習慣なのかも知れん。
だが、知らないものは知らないのだから、名乗りようがない。

「真名とは、その人を表す神聖なもので、本人から預けられない限り、呼ぶことを許されないものなんです。場合によっては、首を斬られても文句は言えません」

随分と物騒な習慣があったものだ。
例え誰かの真名を小耳に挟んでも、それを許可なく呼んではいけないということか。

「なるほど。だが先ほど二人は俺に真名を預けてくれたな。良かったのか？　神聖なものなのだろう？」

俺の質問に、月はにこりと笑って答えた。

「ふふ、呂丁さんは命の恩人ですから。預けるのは当然です」

そういうものなのか…？

月に続いて詠も答えた。

「ゆ、月が預けたからボクも仕方なく預けたんだからね！　し、仕方なくよ！！」

一気に捲し立てているが、顔が真っ赤だ。

説得力など皆無だった。

「ふ、そういうことにしておこう」

「しておこう、じゃなくてそうなの！　ちょっと、なに月まで笑ってるのよ！」

少々騒がしいが、こういう雰囲気も悪くない。

俺たちはそんな調子のまま、城に向かっていった。

二人がいたおかげか、大した問題もなく城に入ることが出来た。

そのまま赤兎を預ける。

「待たせたな」

「…別に大して待ってないわよ」

全く口が減らんな。
まぁ、それも詠の良いところなのだろう。
それ以上は深く考えないことにした。

「くす、行きましょう」
月の言葉に先導され、城内を歩く。
それから余り長い距離もなく立ち止まる。

「ここが調練場です」

「…ふむ」

見渡せば、何人もの兵が刃の潰れた剣なり槍なりを持って訓練をしていた。
……甘いな。
この程度では、戦に出た時の強さには繋がらん。
せめて、今よりも三段ほど厳しくしなければ使い物にはなるまい。
この訓練を指示した将は余程の猪だろう。
戦になっても、強引に突出し、兵の数のみでどうにかしようとするに違いない。

「訓練内容を一新した方がいいだろう。このままでは戦ですぐに壊滅してしまう」

「へぇ…」

俺の言葉に、詠が感心したような声を漏らす。
……俺とて乱世を生きた将だ。
この程度なら、一目見れば分かる。

「ボクだって、この訓練じゃ兵の為にならないのは把握してる。でも――」

「月様！！　お戻りになられたのですか！！！」

「はぁ……来た」

詠が何かを言おうとしていたが、後ろから聞こえてきた女の大声に遮られ、溜め息に変わった。
どうやら、この女に随分と苦労させられているようだ。

「あ、華雄さん」

「月様！　城下で賊に襲われたと聞きましたが無事でしたか！！
ご無事で良かった！！！」

……なるほど、喧しいな。
直情的な性格をしているようだ。

「む。貴様、何者」

俺に目を向けると、そう問うてきた。

「ああ、俺は――」

「まさか貴様が賊！！　月様を人質にしようとは許せん！！！」

「は？」

答えようとした矢先に、盛大な勘違い。

なるほどこいつは直情的というわけではないな。
ただの馬鹿だ。

「ちょ、華雄違うわ。こいつは、」

「賊め！　覚悟ォォォッ！！！」

女は背に携えていた大斧を構えるとこちらに振り下ろしてきた。
馬鹿ここに極めれりか。

「ふん」

大振りな為、防ぐ必要もなくかわす。

「避けるな！　賊め！」

「避けなければ死ぬだろうが」

「ならば死ね！！」

滅茶苦茶なことを。
再び振られた大斧をかわすと、女に足払いをかける。

「うわっ」

簡単に女は転けた。

「落ち着いたか？　まずは話を聞け」

その後、女――華雄を詠が正座させ、月と詠の二人がしっかりと事情の説明をしてくれた。

「うう…済まなかった」

華雄は足が痺れたのか、擦りながら謝ってくる。

まぁ、相手の性格上仕方がないのだろう。

俺自身余り気にしてはいない。

「気にするな。それよりも二人に被害がなかったことを喜ぶべきだ」

あんなに大振りで避け易かったとは言え、月と詠の二人がいるこの場で武器を振るうとは思わなかった。

もう少し状況を考えて欲しいものだ。

「そ、そうだな。月様、詠、申し訳なかった」

頭を下げる華雄。

話を聞かない質(たち)だが、真っ直ぐな性格をしているようだな。

……その話を聞かないことが一番致命的な気がするが。

「…まだ名乗っていなかったな。私は華雄だ、よろしく頼むぞ」

月たち二人の例があるからか、華雄が女と分かっても大して驚かなかった。

……慣れとは恐ろしいものだ。

「俺は呂丁、字は奉聖だ。こちらこそよろしく頼む」

「呂丁？　姓は呂なのか。恋…あ、呂布とは血縁が繋がっているの

か？」

「そう言えばボクも気になってた。どうなの、呂丁？」

ふむ、やはり“俺”は既に配下に加わっているか。

「いや、見たことも会ったこともない。血の繋がりもないだろう」

むしろ同じ血が流れているのかも知れん。
それならば繋がりはないと言えるだろう。
全く同じなのだから。

「そう…。とにかく、その恋も含めて将たちに呂丁を紹介しなきゃ。付いて来て」

話はそこで打ち切られ、今度は詠の先導で歩いていく。

案内され、着いたのは玉座だった。
最奥に月が座り、横に詠が控える。

「これから将をみんな呼ぶから、少し待ってて。華雄、呼んできて」

「分かった」

……華雄、単純な使いに出されているな。
まぁ、扱いやすそうではあるしな。

それから待つこと一刻。

「呼んできたぞ！」

相変わらずの大声で華雄が戻ってきた。
後ろには三人の女がいる。
恐らく全員将なのだろう。
驚きよりも、やはり女か、という気持ちの方が強い。
やはり慣れとは恐ろしいものだ…。

「ご苦労様、華雄。じゃああなたは……調練に戻っていいわ」

「応！」

ずんずんと去っていく華雄。
……何だかその背中が切なく感じた。

「それじゃあ呂丁、三人とも。それぞれ自己紹介して」

「俺は呂丁、字は奉聖だ。武官として仕官させてもらった。よろしく頼む」

俺の自己紹介の後に、今度はさらしを巻いた女が答える。

「ウチは張遼、字は文遠や！　よろしゅうな！」

……これが張遼か。
何やら聞いたことのない言い回しをしているが。
これも個性ということで、気にしないでおこう。

「ねねは陳宮なのですぞ！」

簡単な紹介だな。
しかし、こんな小さい少女があの陳宮とはな。
そして最後に残ったこの一人が……。

「……呂布、奉先。……それと真名、恋(れん)」

やはり、“俺”か。
一目見た時から持っている闘気が違っていた。
……ん、真名？

「恋殿！？」

陳宮が驚いている。
当然だろう。突然顔も知らなかった相手に真名を預けたのだから。

「……かゆーから聞いた。月、助けてくれた」

…なるほど。
しかし、真名を預けるには早いのではないだろうか？

「…それに、見たらわかる。……いい人」

……どうやら、この“俺”はかなりのお人好しらしい。
だが、嫌いではない。
有り難く受け取らせてもらおう。

「……ちんきゅも」

「うう～……ねねは音々音(ねねね)です！　言いにくいならねねで良いですぞ！　恋殿が言ったから仕方なくですぞ！」

詠と同じ言い訳をするねねに、思わず笑みを零してしまう。

「ふっ、ははははは…」

「ななっ、何を笑ってるですかー！」

このやり取りに、張遼が少し不機嫌そうな目を向けていた。

「なんやねん、ウチだけ仲間外れみたいやないか…。ウチは霞(しぁ)や。改めてよろしゅうな」

「ああ、よろしくな。恋、ねね、霞。残念だが俺には真名がないのでな。普通に呂丁と呼んでくれ」

こうして、俺は董卓軍の将たちと顔合わせを果たした。

目的の一つでもあった“俺”に会うことも出来た。

「あ、呂丁。一つええか？」

自己紹介も終え、詠から寛いでいいというお達しが出た直後に、霞から声をかけられる。

「…どうした？」

「や、呂丁って見た感じめっちゃ強そうやん？　ウチも武人っちゅーことで…な？」

何となく言いたいことは分かるが、分かりたくない。

「……どういう意味だ」
嫌な予感しかしないが、先を促す。
「勝負や！」
予感的中。
「恋もやるやろ？」
「……ん、やる」
状況はさらに悪化。
……本気か。

そして、今に至る。
まさかこんなことになるとは、な。
「さーって、呂丁！　武器を構えや！」
「はぁ…分かった」

背にかけていた無双方天戟を手に持つ。
まだ日も高く、日光が刀身に反射して煌めいている。
「こうして見ると、おもろい形しとるやんな、呂丁の武器」
「確かに、普通は誰も持たんだろうな」
そもそも、誰も扱えないだろう。
――未来永劫、俺だけの武器。
「準備も出来たみたいやし、やろか！　詠ー、合図頼むで」
「分かったわ」
俺と霞、互いに構える。
暫しの静寂……。
詠の声が広場に響いた。
「――――始め！！」

奉聖（仮）、顔を合わせるのこと（後書き）

昨日は鈴々が複数の男たちにグチョグチョにされる夢を見ました。
……ごめんよ鈴々。

さて、冒頭のシーンに繋がる部分を最後まで引っ張りましたが、手合わせ自体は次回です。
何故かと言われると、戦闘描写が上手く出来るか分からないんで取りあえず次回に持ち越そうと思ったからです。
逃げました、はい。

相変わらず書いてて呂布とは思えない丸さです。
いっそのこと、正体は呂布でも呂丁という新しい人格が宿ったと考えた方がいいのかも……！？
オカルトじみてきたので、また次回。
では。

奉聖（仮）、全力を出すのこと（前書き）

霞戦は余り変化はないですが、恋戦での強さの違いを変えています。
呂布（丁）の方を上方修正で。

一応他の話も変な部分があれば修正していこうかと…。

奉聖（仮）、全力を出すのこと

霞の偃月刀が俺に向けて放たれる。
――なかなか疾い。
一歩後ろに下がり、方天戟で弾く。
甲高い鉄の音が響く。

「たはーっ、今の防がれるとは思わんかったわ」

「ふん、馬鹿を言う。まだ手を抜いているだろうに」

そう。
確かに、今の攻撃は線でなく点の一撃だった、普通に回避するのは難しい。
しかしまだ疾くなる。
神速と呼ばれる所以を見せてみろ。

「んじゃ、もちっと早よするで」

「最初から本気にするべきだ。それでは俺に勝てんぞ」

俺の言葉に霞は眉を顰めた。
手加減しているとは言え、自分より格下だと断じられているのだ。
当然だろう。

「……後悔しても、知らんで」

――――霞の目つきが変わった。
恐らく本気で来るだろう。

「後悔などせん。俺も本気で行こう」
だが、全力は出さない。
…別世界と言えど、張遼を殺したくはないのでな。
「いくで。――――――疾ッ！！」
一瞬、霞の姿がブレて見えなくなる。
並の将なら初見で敗れるだろう。
かなりの疾さだ。
――並なら、な。

頭上に戟を掲げ、ぶつかり合う手応えを感じる。
当たりだ。
俺は戦に於いて、主に自身の武のみで戦うが、敵が死角から矢を射るなど、目では確認出来ないことがある。
それを、天性の直感とでも言おうか。そちらに目を向けることなく叩き落とす。
見えなくとも、『分かる』のだ。

「……チッ」

初撃を防がれ、霞は舌打ちする。
霞は再び神速の攻撃を始める。
だが――初見さえ防げれば、後は見える。
右、左、右、上、後ろ。
防ぐ内に余裕が出来始め、防ぐのではなくいなすようになる。
方天戟の構造上、いなすのは簡単ではないが俺にとってはその限りではない。

最終的に、避けることすら出来るようになった。

「はぁっ……はぁっ……！」

霞はかなり息が上がっている。
何度も防がれ、それどころかかわされてすらいるのだ。
突くのに力が必要だし、さらにそれを引き戻すのに更に力を要する。
息が上がってしまうのも分からない話ではない。

「今度はこちらから行くぞ」

地を蹴り、霞に肉迫する。
槍を構え、迎え撃つつもりのようだ。

ぶつかり合うと共に、火花が散る。
俺は、方天戟を上下左右と縦横無尽に振るう。
間断なく攻める……！

「……く」

霞が苦悶の声を漏らす。
想像以上に攻撃が熾烈だったらしい。
だがまだだ、まだ終わらんよ。

方天戟の中心を外し、右手と左手に二つに分かれたそれを持つ。
これによってさらに攻撃の幅が広がる。
合わせた状態に比べれば、一撃の力は落ちるが、な。

「なっ…！？　なんやねんそれ、ホンマにおもろい武器やなぁ……！！　楽しいで、呂丁ッ！！」

二つに分かれても尚、武器から伝わる重さは変わらない。
霞も、戦いを楽しんでいる様子ではあるが…その顔には大粒の汗が浮かんでいる。
素早い動きで捌いているが、そろそろ腕も限界だろう。
ならばここで、武器に込められている“属性”の力を使わせて貰う。
交差する互いの得物。
そして、左手から伝わったその力は――――偃月刀を持つ霞の手を凍結させた。

「え――――――!?」

「ふんっ!」

霞が驚いているところに、振るった右手にグッと力を込める。
霞は慌てて防ぐが、衝撃から手の氷は砕かれ、そのまま偃月刀は手から抜けて、離れた場所に突き刺さった。

「――――そ、そこまで!」

詠の声がその場に響き、俺と霞の手合わせは終了した。

「うへぇ、呂丁。想像以上やったで…手が痺れて適わんわ」

霞は心底痛そうに両手をプラプラと振っていた。
酷いものではないが、軽い凍傷も見受けられる。

「なんやったんや？　あの…手がピシピシー、言うたやつ。凍るなんて、普通やないやろ」

まぁ、気になるのも当然か……。
しっかり説明してやった方が良いだろう。

「あれは特殊な技術でな。武器に炎、氷、雷の力のどれか一つが組み込まれているんだ。俺の武器には、氷の力が込められている……。中には、“陰”なる力もあり、それはどのように敵を斬っても必ず絶命させるものだった」

「怖っ……なんやそれ、世の中不思議なこともあるんやなぁ」

その不思議をそんな軽い一言で済ませれる霞も不思議だ。
とは口に出して言わない。
余計なことは言わない方が良いのだ。

「取りあえず、手は治療しておけ。
軽くても、後から悪化するかも知れんからな」

「へーい」

飄々とした態度で霞は歩いてい……かなかった。

「せや、呂丁と恋の勝負見なアカンやん」

そのまま詠の隣に腰掛けた。
……手の治療はどうした……？

今度の相手は恋……“俺”だ。
俺が乱世を生き抜く中で出会うことのなかった最強の相手。

霞とは本気で戦ったが、恋とは全力で戦わねばならんか。

「恋殿ー、がんばるのですー」

ねねののんびりした応援が広場にこだまする。
俺たちは互いに構え合い、鋭い目線を交差させる。

先ほどの霞の時以上の緊張感が場を包んでいる……。
実は、既に詠は俺たちに始めの合図を下している。
だが、互いに隙がなく、どちらも仕掛けれなかったのだ。

「――――――！」

恋が先に動いた。
霞ほどではないが、かなり疾い。
正面から互いの戟がぶつかる。

「む――――――？」

おかしい。
恋は謂わば俺自身。
だが、手応えを余り感じない……。
確かに、霞以上だ。それは間違いない。
それにしても、この程度では余りに、……弱い。

「……やっぱり呂丁、強い」

恋が戟を押して後ろに下がり、体制を立て直す。
戟を構え直すと、同時に雰囲気も変わる。
なるほど、実力を隠していたか。

それならば、まだ楽しめるか。

「恋も本気、出す」

――――疾い。

残像を残す程の動きで、恋は俺の右に現れる。

直ぐ様戟を振るい、恋の攻撃を防ぐ。

が、その直後には真逆の場所に現れる。

“神速の張遼”を凌ぐとは……かなりのものだ。

なるほど、確かに恋は俺だ。

改めて認識する。

だが――――不思議と、負ける気はしない。

恋の猛攻は凄まじい。凄まじいのだが、直感に頼るまでもなく捌いている。

霞の疾さは直感を以てして防いだというのに、それ以上の恋を何故捌けるというのか……。

考えても分からなかった。

兎に角、今は恋の攻撃を防ぐとしよう。

それから――――何度も何度も、広場には鉄の音だけが響いていた。

「あ、アカン。もうウチには呂丁が一人で戟を振るってるようにしか見えへん…」

「ねねには呂丁殿の腕も見えないのですぞ…」

「…ねぇ月、あの二人は人間止めたの？」

「え、詠ちゃん…」

強いが、確実に勝てる。
それが俺からの恋に対する評価だった。
だが、今のまま……『本気』の段階では時間が掛かり過ぎる。
いい加減決着を付けた方が良いだろう。

――――そろそろ、『全力』を出そう。

これを一度使うと、暫くの間は再使用が出来なくなる。
暫くと言っても、三日ほど経てば使えるのだが。
しかし、過去に一度だけ“これ”を使った状態でも勝負が付かなかった戦がある。
その際、不思議なことに三百ほど敵を討った時、ふと身体が軽くなった。
時間の経過だけでなく、敵を討つことでの再使用が可能だったのだ。
理由は分からないが、戦いの中で得た俺の経験の賜物なのだろう。
兎に角、俺をそれを使い、すぐに決着を付ける。

「恋――――凌げよ」

「……？」

恋も、俺の様子が変わったことに気付いたのだろう。
俺の全身から赤い気が溢れ、あらゆる力が増幅される。
これは武器に備わる力ではなく、俺自身が持つ特殊技能……『強襲』だ。
俺たちの世界に於いては、名を轟かせた将は必ず『神速』などと言った技能を持っており、上手く使えば戦局すらひっくり返すこともある。

「ふっ――――！」

振るった戟は、今まで以上の一撃を恋に与える。
その衝撃か、恋はその場から後ろに大きくずり下がった。

「っ……ぐ」

大幅に力を上げた俺に動揺しているのか、恋は目を見開いている。
が、すぐに持ち直す。流石は恋だ、突発的な事態にも冷静に対応出来ている。
だが、先程まで拮抗していた力も、今は俺が圧倒的に上。
このまま決めさせて貰う。
攻勢に転じ、一気呵成に叩き込む。
風切り音が幾度も鳴り響く。
それでも恋は、汗を流しながらも捌き続けている。
強襲の力も余り長くは続かない。
これ以上時間をかける訳にはいかない…。
ならば、更に、更に疾く、どこまでも疾く――――――！！

「おおおおおッ！！！！」

――――静寂。

まるで世界の全てが音を失ったかのような……静寂。
俺は全ての攻撃を終え、地に降り立った。
互いに背を向け、それぞれの武器を持っている俺と恋。

「ど、どうなったんや……」

「し、知らないわよ…、何にも見えなかったんだから！」

「恋殿ぉ……」

「呂丁さん……」

霞たちも、戦いの結末を固唾を飲んで見守っていた。
そして――――暫しの静寂の後、台風のような大きな風の音が広場を揺らした。
実際に風など起きていない。ただ音が響いただけだ。
…音の発生源は、恋のいた場所。
つまり、俺が先程猛攻を行った場所だ。

「……強かった」

恋はそれだけ言うと、その場に倒れた。
その身体には、小さいながらも無数の切り傷。
攻撃の後に、大きく音だけが鳴る理由などは、一つしかない。
俺は――――音を抜き去ったのだ。
戟を振るう腕の素早さの、限界の更に限界を超えて。

「俺も、全力で戦える相手が出来たのは、嬉しく思うぞ…」

素直に恋への賛辞の言を送る。
恋はまだ強くなる。
そして、俺もまだ……。
しかし、今日は未だに休息を一度も取っていない。
流石に疲れた、な。

「ふぅ…ねね、恋を介抱してやってくれ」

「……ハッ。れ、恋殿ー！」

呆然としていたねねだったが、正気に戻ると倒れた恋の下へ駆けていった。
それを眺める俺に向かって、背中からかけられる声。

「呂丁」

「む、霞か…どうした？」

不機嫌そうな表情の霞は何かを言いたげだった。
なんとなく、何を言わんとしているのかは分かるが。

「さっきの恋にやったアレ、なんや。ウチには手加減しとったんか…？　答えぇや、呂丁！」

やはり『強襲』のことか。
しかし、使用後の反動が激しい為に、これは諸刃の剣と言える。
恋との戦いを控えていた以上、霞を相手に使うのは得策ではなかっただろう。

「アレは三日に一度だけしか使えん。それに、アレを除いていれば霞にも本気を出していたぞ…」

「ふぅん、ならええわ」

あっけらかんと言う霞に、逆にこちらが呆気に取られる。

……韻を踏んだつもりはないぞ。

「ま、ヒマな時にでもまたやろなー。そん時、ウチにもアレ使うてな」

「……ああ」

全く、良い性格をしている。
だが、話していて気持ちのいい相手だ。
“あちら”の張遼も、これくらいなら楽なんだがな。
あいつは少し堅すぎるところがある。
それもあいつの良いところなんだろうが。

「り、呂丁さん！」

「月か」

「霞さんとも話してましたが、それは一度使うと、三日も使えないらしいじゃないですか！　無茶しないで、下さいよ……」

「――――」

悲しそうに顔を伏せる月。
確かに、時間をかけない為とは言え、強引に事を進めてしまった部分がある。
それに、仕官したばかりと言えど、次の日から、いや、今日からすぐには戦いがないとも限らない。
俺の武に自信がないわけではないが、些か早計だったか。
なれば……。

「済まなかった。できる限り、強襲は行使せぬと誓おう」

「…はいっ」

顔を上げた月は、悲しそうな色はなくなっていた。

……彼女は、笑っていた方がいい。

「あー、はいはい。呂丁、これからボクが部屋に案内するから、良い？」

「あ、ああ、頼む」

どこか不機嫌な詠が、有無を言わさぬ口調で案内を言い出した。

反射的に肯定してしまった…。

「ほら、行くわよ」

「あ、呂丁さん！」

「……む？」

「――――これから、よろしくお願いします！」

……本当に、優しい娘だ。

「ああ、よろしくな…」

「早くしなさいよ！」

「…今行く」

それに対して、こちらは喧しいがな。

手合わせの結果は、俺は無傷で、軽い疲労程度。
霞は右腕に凍傷。明日には問題なく動くだろう。
恋は全身に浅い切り傷。命に別状はない。
……俺の一人勝ち、か。
恋は確かに俺だった。
だが、女であることが、響いているのか？
思っていたよりも、手応えはなかった。
それとも、“外史”という環境が関係しているのか？
……考えても分からん。
今は、この疲労を消す為に、休息を取ることに集中しよう。

奉聖（仮）、全力を出すのこと（後書き）

前書きでも言いましたけど。
やりすぎました。

なにこれ！？
強襲は確かに強いけどこんなハイスピードバトル出来るものじゃなかったよ！？
なに音を抜き去ったって！？
姿が見えない戦いってなに！？
ドラゴンボールか！！

……失礼しました。
頭の中で“呂布”は大体チートだな、と思っていた部分があったとは言え、流石にこれは……いや……うむぅ……。
深く考えないようにしましょう、まる。

奉聖（仮）、酒を飲み交わすのこと（前書き）

随分間が空いて申し訳ない！

何だか、呂丁に済まないばっかり言わせてる気がします。
恋姫キャラと違って扱いづらいんだよこの人！
三國無双から引っ張ってきたの失敗だったかなぁ…。

取りあえず、完結はしっかり目指すつもりなので、どうかよろしくお願いします。

奉聖（仮）、酒を飲み交わすのこと

「……知らない天井だ」

目が覚めて最初に放った一言は、大嘘だった。
知らないなどということはない。詠の案内の下でこの部屋を一度見ているのだから。
しかし、何故か言わなければならない気がした。
…何故だろうか。

「呂丁、目が覚めたのね」

詠が部屋に入ってきた。
ああ、と一言返し、軽く伸びをする。

「…どうやら、だいぶ寝ていたようだな。空が暗い」

窓から見える景色は、一面黒。
しかし、その闇の中では煌々と星が瞬いていた。

「ん、まぁそうね。あれからもう夜だもの……余程疲れてたんでしょ。
しかし、恋もまだ寝てるし…あんたたち、随分派手にやり合ってたみたいね？　おかげで広場が穴だらけ、ボロボロよ」

「はは、それは済まなかったな。…さて詠、俺に何か用があったんじゃないのか？」

俺の質問に多少面食らったようだが、すぐさま調子を戻す。

頭の切り替えが早いのも軍師や文官として重要な要素だ。
それを踏まえれば、詠はとても優秀だと言える。
……ねねは見た限り、切り替えは遅そうだな。頭は良いのだろうが。

「ずいぶん勘が良いわね。
呂丁には武官として入ってもらったけど、街の人には顔も知れてないからね。警邏をやってもらうついでに、顔見せを兼ねてもらおうと思って。今は説明だけだけどね」

「ふむ」

なるほど。
確かに、俺は今日仕官したばかりだ。
顔も知らぬ者が堂々と街中を闊歩していては怪しい。

「そういうことか。了解した、明日にでも警邏に出るとしよう」

「お願いね、呂丁」

にこりと詠は笑う。
……愛らしい笑顔だ。
要件はそれだけだったようで、詠は部屋を出て行った。

愛らしい笑顔、か。
――――なるほど、確かに俺は変わったのだろう。
今までであれば、誰かの顔を見ることなど気にも留めなかっただろう。
これも、貂蝉の影響か。
悪く言えば、牙をもがれたと評されるかも知れん。
だが、これはこれで悪くない。

つまり、今までの俺は獣だったのだ。
こうして、誰かを思い、誰かを慈しむ。
それこそが人。
それを知った今こそ、俺は人になれたんだろう……。
心地良いその気持ちに、今は浸っていたかった。

――――――――――――――――――――――――

「なんだ、宴か？」

恋の目が覚めたというので、部屋から出てそこに控えていた侍女――この侍女の名、真名は風花（ふうふぁ）というらしい。どうやら俺付きの侍女になるよう命じられたようだ。いきなり真名を預けることもないと思うが――の先導のもと玉座に向かうと、何やら騒がしい。
いざ扉を開くと、そこは阿鼻叫喚。
どんちゃん騒ぎだった。

「おー、呂丁やん。こっち来ぃやー」

既に出来上がっている様子の霞がこちらに手招きをしていた。
横では華雄も一緒に呑んでいる。

「うぅ……わらひはぁ！　れんにもしあにもかてんのだぁ！　うわああん！」

泣き崩れた。
…泣き上戸らしい。
正直、あそこに近付くのは危険な予感しかしない。
君子危うきに近寄らず、とも言うし、俺は華麗に無視することにした。

「風花、これは何の宴なんだ？」

側にいた風花に尋ねる。
恋の目が覚めたから来たというのに、この状況は全く頭が追いつかん。

「賈駆様主催で、呂丁様の歓迎を行うことにしたのですわ。ふふ、驚かれているようで何よりですわ」

「そ、そうか」

どうやら風花も一枚噛んでいたようだ。
しかし…風花の喋り方はどうも慣れん。
何やら根本からの違いを感じる。
何というか、金ぴかなナニカが……はっ。
なんだ、今妙な電波を受信して……。
そもそも電波ってなんだ！？

「呂丁様？」

「あ、ああ。済まんな、俺たちも参加しようか」

「くす、参加も何も、主賓は呂丁様ではないですか」

「そ、そうだな…」

く…会話の流れが掴めん。
その名前の通り、風に靡く花のような少女だな…。
良い意味でも、悪い意味でも。

宴会という名の混沌の渦へと身を投じる。
その中で恋を探していると、隅の方でねねと二人で呑んでいた。

「……呂丁」

「おお、恋か。昼間は済まなかったな」

こちらから声をかけるつもりだったが、向こうから話しかけてくれるなら僥倖だ。
このまま話を続けるとしよう。

「ん…いい。楽しかったから…」

そう言ってくれるが、褐色の肌には昼頃は付いていなかった包帯が巻かれている。
深い傷ではないだろうが、無理をしているのなら良くない。

「しかし――――」

「恋がそう言ってるなら、それでいいじゃない？　しつこい男は嫌

われるわよ」
一言加えようとすると、後ろから声をかけられる。
「……詠か」
「なによ。ボクだったらいけないことでもあるわけ？」
悪態を吐かれる。
別段、詠だから何が駄目だということもない為、そんな悪態も痛くも痒くもないのだが。
そんな皮肉めいたことを言うわけにもいかない為、普通に否定をしておく。
「いや、そんなことはない」
「ふぅん。とにかく、あんまりしつこくしないようにね」
酒が入っている為か、大して深く追及されることはなかった。
詠はそのまま月の下へ去り、再び俺は恋に向き直る。
「…詠にも言われてしまったし、これ以上は気にしないようにしよう。さて、俺も飲もう、隣いいか？」
「……ん」
すっと恋はその場からずれる。
二人分ほどの幅が出来た。
「済まんな」

礼を言ってから座る。
料理や、酒の香りが鼻を擽る。
流石に都なだけはある。
上質な物を揃えているのだろう。

「美味そうだな。何から手を付けるべきか迷うぞ」

食えば美味いのだろうが、見た目でも楽しませてくれる。
思わず、食うのを躊躇うほどだ。
嘗ての俺には理解出来なかった、あの張コウという男の言うように“美”がそこにあった。

「…食べないの？」

「せっかくの料理に手を付けないとは失礼なのですぞ！」

どうやら、迷う時間が長すぎたらしい。
恋とねねの二人がこちらを見ている。

「ああ、もちろん食うさ」

――迷っても仕方があるまい。俺らしくもない。
俺は、近くにあった点心に手を伸ばした。
それを見て二人は満足そうにそれぞれの食事に戻った。

ああ、そう言えば。

「風花、お前も食うといい。いつまでもそこに控えているのも疲れるだろう」

「えっ」

自分に話を振られるとは思ってなかったのか、目を丸くして驚いている。
そこまで驚くことか？

「そんな、悪いですわ。私は呂丁様の後ろで、」

「アレを見ろ」

風花の声を遮って、向こうを指差す。
指された指の先には、華雄と霞に絡まれ、べろべろに酔った兵の姿だった。
多分、俺が華麗に無視をした為、代わりに犠牲となったのだろう。
済まんな、名も知らぬ兵よ。
お前の犠牲は無駄にせん。

「あのように、相手の都合を全力で蹴り飛ばし絡む者もいるんだ。
俺の方が幾分優しいと思わんか？」

「え、ええ…まぁ…」

「だから飲め」

「はぁ…分かりましたわ」

よし。
勢いで押し切った。
こういった相手の場合は、とにかく押すしかあるまい。

だから俺の判断は間違いではないのだ。
……多分。

「ん…美味しいですわ」

「そうだろう」

何だかんだで、飲めば誰も彼も同じ。
いわゆる飲み友というヤツだ。
何だか良く分からんがとにかくそういうものなのだ。
…俺もそれなりに酔いが回っているのやもしれん。

「呂丁様、お注ぎいたしますわ」

「む…済まんな」

風花に酒を注いでもらう。
貂蝉以外の女を愛することはないが、やはり美しい女に注がれた酒は美味い。
男として、それは譲れんのだ。

「うむ、美味い」

「良かったですわ」

俺の感想に、顔を綻ばせる風花。
そもそも、先ほどまで飲んでいた酒と同じなのだから、不味い筈がない。

悪い気はしないが、何故そこまで喜ぶのかが良く分からなかった。

「む…呂丁」

「ん？」

恋が声をかけてきたので振り向く。
見れば、徳利を掲げてこちらに口を向けていた。
どうやら酒を注ぐつもりのようだ。
せっかくの厚意なのだし、受け取っておくべきだろう。

「ありがとうな、恋」

「ん」

とくとくと注がれる酒を眺めながら礼を言う。
恋は嬉しそうに頬を染めた。

「むー…」

何やら風花が不機嫌そうだ。
何故だ？

「れれ、恋殿！　なにしてるですかー！」

ねねが憤慨している。
まぁ、ねねは恋至上主義とも言えるようなものだ。
別に不思議じゃあない。

「呂丁が喜ぶと思ったから…」

恋は赤く染まった顔を隠そうとせずに言い切った。
酔った勢いが大きいのだろう。
そうでなければ、出会ったばかりの男にそんなことをする筈もないしな。
ただ、横から感じる風花の黒い雰囲気は理解出来ん。
一体何故なんだ。

「くうぅ…！　よくも恋殿を誑かしやがったのです！」

気付けばねねの怒りが頂点に達していた。
有頂天に非ず、頂点である。
しかし、誑かしたとは失礼な。
しっかりと誤解を解かねば。

「そういうわけじゃない…。恋も酔っているんだ。それにただ親睦を深めたいだけかも知れんだろう。そうだろ、恋？」

「違う」

逃げ道を本人に寄って塞がれた。
一体どうしろと言うのだ…。

「呂丁様が悪いですわ。一切合切、徹頭徹尾」

「！？」

まさかの第三者（風花）からの攻撃。
俺が一体何をしたと！？

「ちんきゅーきーっく！」

「ぐはぁ！」

風花に目を向けている隙に顎に一撃。
ぐおぉ…頭がふらつく…。

「天誅！　なのですぞ！」

そもそも俺は何もしていない…。
もはや文句を言う気力も起きなかった。

「そういうことで良いから、もう勝手にしてくれ…」

それだけ言って、再び杯に手を伸ばした。
それからは、風花と恋に挟まれて酒を注がれ、その度にねねが蹴りを繰り出すということが続いた。
一度食らっていた為、ねねの蹴りを避けるのは容易だった。

「いつか必ず、ねねがお前に天罰を与えてやるのですぞ！」

お前は天人じゃないだろう…。
それを口に出さなかっただけ、誉めてもらいたいものだ。

奉聖（仮）、酒を飲み交わすのこと（後書き）

後半適当気味か…？
前半１１月に書いて、後半今日だけで書いて…この間によって文体に変化が生じたか！？

あと、前回の活動報告に書かれたアンケートに出来ればお答え下さいな。
一応ここでも改めて。
今回で六話ですが、十話を更新した時点でアンケートは締め切りです。

内容は、呂丁…というか、呂布にマルチレイドのような覚醒をさせるかどうかです。
もし使わせるなら、決定してすぐではなく何かの切っ掛けを経てからにしようと思ってます。
修行とか、死の淵からの生還とか、穏やかな心を持ちながらの激しい怒りとか。
例の一部は冗談としてそんな感じで、パワーアップです。

まぁ、個人的には五胡を相手にするなら覚醒あった方がいいかな？
という気持ちではありますが、皆さんの意見をお聞かせ下さい。

では、また次回。
そして良いお年を！

恋、知らない感情に戸惑うのこと（前書き）

恋主観の挿話！

……の、つもりです。

うああ！

恋の主観て凄く書きづらい！

普段余り喋らない分、心の中は色んな気持ちが渦巻いている筈！？

という、謎の脳内理論を展開した結果でした。

ひぎぃ。

恋、知らない感情に戸惑うのこと

最近、黄色い布を巻いた賊が増えて、討伐に駆り出されることが増えた。
しかし今日は珍しく休暇を貰い、いつもみたいにねね、セキトと遊んでいた。
東方の遊具らしい『歌留多』なるものだ。
片方の札に書かれた詩の頭文字を探し、その頭文字の書かれたもう片方の絵札を相手より先に取る。
なくなるまでにより多く取った方が勝ち、というものらしい。

「ねね、それ違う。こっちの『ふ』の札が正解」

「ずっ、ずるいですぞー！　ねねはセキトの読む札は分からないのですぞ！」

ずるいことなんてないのに、ねねは変。

「ワンワン」

「ん」

い…、犬も歩けば棒に当たる。
あった。セキトみたいに可愛い犬が描かれていた。
すぐに手を伸ばす。

「邪魔するぞ！」

と、そこに乱入者。

…華雄だった。
ねねがそちらに気を取られてる間に札を取り、胸に抱いてみる。
……ほっこり。

「な、なんだこの札は。……恋はいったいどうしたんだ？」

「れ、恋殿？　あ、これは歌留多なる遊具で――――」

……ほっこり。

「――――というわけだ」

「ふぅむ。素性も知らぬ者に会うのは嫌ですが、月様を助けたのは評価出来ますぞ。会ってやるです！」

気が付くと、華雄とねねが何か話し込んでいた。

「……どうしたの？」

「は？　…聞いていなかったのか」

「恋殿、城下で月様を助けた者が仕官しているらしいのです。これから会いにいくのですぞ」

どうやら新しい仲間がいるらしい。
月を助けてくれたみたいだし…信じてもいいと思う。

「なら行く」

「うむ、助かる」
「では、行くのです――――」
「話は聞かせてもらったで！！」
「ぞー！？」

今度は霞が来た。
ねね、ぞーってなに。
「なんや騒がしい思たら、おもろそうな話やないか！　ウチを差し置いて話を進めようなんてそうは問屋が卸さへん！」
「いや…霞。二人の後はお前を、」
「黙らっしゃあ！」
「ひぃ！」
華雄が怒られた。
何だか見てて面白い。
「ウチも連れてけやぁ！」
「わ、分かった！　分かったから、落ち着け！」
「ふ…分かりゃあええねん」

「なにこれ屈辱」

そんなこんなで月達の元へ。

「俺は呂丁、字は奉聖だ。武官として仕官させてもらった。よろしく頼む」

そこで出会ったのは、屈強な武人。
その雰囲気、佇まい。
圧倒的な存在感。
――――魅せられた。
その言葉以外に表すことが出来ない、この心情。
きっと、この男の在り方は自分と同じ。
そんなことを、思った。

「……呂布、奉先。……それと真名、恋」

だからこそ。
この男になら、預けてもいいと思えたのだろう。
ねねにこんなこと言えば、また騒ぐのは目に見えてる。
だから今回だけ、嘘を吐いた。
月を助けてくれたから、と。
本当の理由は、誰にも内緒。

それぞれの自己紹介が終わった後、霞が呂丁に声をかけた。
手合わせを希望しているようだ。
……確かに、呂丁の実力は気になる。

それに、今感じている不思議な感覚の正体も、分かるかも知れない。

「恋もやるやろ？」

「……ん、やる」

同調させるような霞の問いに、当たり前のように返した。

――呂丁の強さは、想像以上だった。

霞は強い。

負けるつもりはないけど、霞の疾さは目を見張るものがある。

だが、呂丁はそれを簡単にあしらった。

多分、あれはまだ力を出し切ってない。

……恋も、負けるかも知れない。

本気でいかないと…。

詠の合図が出されても、恋も呂丁も動かなかった。

…呂丁には、隙がない。

でも、このままだと何も進まない。

まずは――仕掛ける！

正面から方天画戟を振るう。

防がれる。これはまだ予想の範囲内。

「……やっぱり呂丁、強い」

「お前もかなりのものだ、恋」

褒められたのは嬉しい。

けど、ここで慢心なんてしない――――

「恋も本気、出す」

呂丁の右側に移動し、一撃を繰り出す。
呂丁も、素早く反応し、今の攻撃を防いでいた。
これでも防がれる…！？
く……まだまだ…！！
もっと、もっと疾く……！
こちらの気持ちの焦りとは裏腹に、呂丁は未だに汗一つかかずに防ぎ続ける。
そして――――雰囲気が、変わる。

「恋、凌げよ」

「……？」

視界には、赤。
炎のように、それは燃え上がった。

あ、早く、防がないと、危な、い。

本能的に腕を上げた。
そこには既に呂丁の戟。
もう少し遅ければ……。
戦慄し、背を汗が流れる。
だが、そんな思考をする間もなく怒濤の勢いで攻める呂丁。

「っ……く！」

さらに勢いが上がっていく呂丁の攻撃。
疾い……余りにも疾すぎる……！
そんな……まだ疾く――――――

目の前から、呂丁が消えた。
瞬間、一陣の風が頬を撫でた。

あ、という声すらも出せず、暴風が巻き起こる。
肌に刻まれていく切り傷。
――――これが、規格外。
武の、頂（いただき）。

「……強かった」

それだけ言って、その場に倒れる。
…本当に強かった。
少しずつ、景色が暗くなっていく。

「……俺も、本当の全力で戦える相手が出来た。……嬉しく、思う……ぞ…」

暗い景色の中でも、その言葉だけは、強く耳に残った。

――――――――――――――――――――――――

目が覚める。
そこは見慣れた自分の部屋。
傍らには、突っ伏して眠るねねの姿。
きっと、一時も離れずにいてくれたんだろう。

「…ありがとう」

漏れた呟きと共に、いつも一緒にいてくれる友の髪を一撫でした。
すると、閉じられていた愛らしい目蓋がぴくりと動いた。

「んにゅ……はっ、恋殿？　目覚められたのですか！？」

「ん、もう大丈夫」

「はぁ…良かったですぞ。しかし呂丁…！　いくら恋殿が強いとは言え、もう少し手加減しても良いものを！」

ねねはそう言うけど、それは違う。

「恋が呂丁の本気を見たいと思った。呂丁はそれに応えただけ」

「うむぅ…恋殿が言うなら……」

それから、ねねとは他愛もない話をして、暫くすると侍女が宴があると伝えに来た。
どうやら、呂丁の歓迎の為らしい。
そういえば、かなりお腹がすいている。

ねねを伴って宴会場へ向かった。

「おー恋、体平気かいな。もう始めとるでー」

入るなり開口一番、霞が声をかけてきた。
隣には華雄もいる。

「大丈夫」

それだけ言うと、霞は「そっか」と言って自分の酒を煽り始めた。

「恋たちも、食べる」

「そうですね。多分あそこですぞ」

ねねが指差す先には誰も座っていない。
恋たちの為に空けといてくれたんだろう。
すぐさまそこに座る。

「早く、ねね」

「ふふ。恋殿、食べ物は逃げませんぞ」

ねねに早く座るよう催促するが、軽く返される。
むー、ご飯は逃げなくても美味しさは逃げる。

「早く、早く」

「うふふふ、恋殿は可愛いですな。うふふふふ」

ようやく座ってくれた、いただきます。

「はむはむ」

「うふふふふ」

「はむはむ」

暫く食べていると、入り口に呂丁が来た。

その姿を見ると、胸に今まで感じたことのない不思議な温かさを感じた。

――これは何？

何も分からなかった。

…見れば、呂丁の傍らには侍女が一人。

ちくり、と胸が痛んだ。

……何故？

「風花、これは何の宴なんだ？」

呂丁が侍女の名前を呼んだ。

風花、と。

ちくり。痛い。

どうして痛いのか分からない。

でも、何だか悲しくて、切ない。

その痛みを少しでも和らげたくて、こちらに歩いてきた呂丁にすぐに声をかけた。

「……呂丁」

「おお、恋か。昼間は済まなかったな」

――恋。

名前を呼ばれた。

それだけで、ちくりとした痛みはなくなった。

「ん…いい。楽しかったから…」

痛みもなくなり、ようやく普段の調子で呂丁と話を出来るようになった。

しかし、呂丁の方は昼間のことにまだ負い目を感じているらしい。

そこに、詠が現れ呂丁を一言二言ほど窘めると、月の下へ戻った。

「…詠にも言われてしまったし、これ以上は気にしないようにしよう。さて、俺も飲もう、隣いいか？」

「……ん」

むしろ、隣に座って欲しいと思った。

体をずらし、呂丁の座れる幅を空ける。

「済まんな」

隣に呂丁がいる。

そう意識すると胸が熱くなった。

顔も熱い。赤くなっていないだろうか？

そんなことを気にしていると、呂丁がまだ料理に手を付けていない

のが目に入った。
「…食べないの？」
そう問うた。
ねねもそれに同調した。
すると呂丁は少しだけ驚いたような表情をして、
「ああ、もちろん食うさ」
と返した。
美味しそうに食べる姿に、恋もねねも何だか嬉しくなった。

食事を続けていると、侍女――風花の声が耳に入った。
「呂丁様、お注ぎいたしますわ」
「む…済まんな」
「！？」
注ぐ…？
つまり、お酒を？
ちくちく。
また痛くなってきた。
風花への嫌な感情が出てくる。
「うむ、上手い」
「良かったですわ」

ちくちくちくちく。
痛い、痛い。

「…呂丁」

「ん？」
徳利を手に持ち、呂丁に向ける。
どうやら、恋の考えていることは伝わってくれたらしい。
杯がこちらに向けられた。

「ありがとうな、恋」

「ん」

呂丁からの礼に、凄く嬉しくなった。
同時に、風花に感じていた嫌な気持ちもなくなった。
それから、何度も同じやり取りがあったけれど、もう嫌な気持ちが出てくることはなかった。

———何だか、不思議。
さっきから変わり続けるこの気持ちは……一体何なのだろう。
その正体は分からないけど、取りあえずは呂丁の杯にさらにお酒を注ぐことにした。

「……腹が、きつい」

宴が終わった頃には、呂丁はフラフラだったことだけ記しておく。

恋、知らない感情に戸惑うのこと（後書き）

ごめんなさい。

……怒って、ないですか？

違うんです！

適当にやった訳じゃないんです！

ほら、アレですよ。

戦いを通じて互いを分かり合う的な。

そして、その中でも呂丁から感じる優しさを受け止めて……キュン！

というわけで――――ぐはぁ！

ちょ、止め、痛、なにそのデカい岩！？

そんなのは孫堅さんとかラオシャンロンぐらいしか――ひぃ、雪蓮しゃん！

嘘です！孫堅さんについては嘘でした！いややめて来ないでｑぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ（ｒｙ

さて、現在のアンケート状況は

覚醒アリ　２

覚醒なし　０

です。

何故着信アリみたいに書いたのかは自分でも分かりませんがね。今回は一応七話目に当たるので、あと三話分うｐすれば締め切りです。不定期ということもあるんで、十話目がいつになるかは分かりませんけど、もしかしたらかなり早く終わるかも、ということもあるので、出来ればお早いご意見をお願いします。

あと、気付いてるでしょうけど、もうめんどくさいので前書き後書

きでもはっちゃけてます。
堅いのは感想返信だけということで！
では。

奉聖（仮）、己の内を知り、明かすのこと（前書き）

約2週間ぶりです。
ちょこちょこ書き進め、今日は暇だったんでひとまずは投稿まで漕ぎ着けました。
次話はもっと早く済ませたいなぁ。

あ、現在のアンケート状況ですが、
覚醒アリ　3
覚醒なし　0
です。

十話投稿時まで続けますとか言いましたけど、あれ？これアンケートこれ以上入れる人いなくね？という不安感が激しく出てきたんで、やっぱり今月いっぱいにしようと思います。
ぶっちゃけ、十話までどれくらいかかるか分かりませんし…。
初期の勢いならとっくに十話までいってたんだけどなぁ、加速も早いし失速も早い。
最悪のパターンですｏｒｚ

まぁ、こんなんでも一応は頑張りますんでよろしくです。

あと、これからは後書きをネタ満載の嘘予告にしようかなと。

奉聖（仮）、己の内を知り、明かすのこと

――人が多い景色のことを、有象無象と思うか、活気があると思うか。
昔なら前者、今なら後者だ。
考えられるだろうか？
天下の飛将軍と恐れられ、幾千の将兵を塵芥にしてきた俺が、こうして街行く人々を見て心穏やかにする。
なあ、貂蝉。
見る者の心が変わるだけで、世界はこんなにも違うのだな――」

「……呂丁、さっきからなにブツブツ言うとんねん。怖いで？」

「む」

霞に突っ込まれる。
…どうやら声に出てしまっていたらしい。
いかんな。

「そんなことよりー、呂丁。あっち行かへん？　なんかええコトある気がすんねん」

そんなこととは酷いな、霞よ。
しかし、良いこと、か。
何について言っているのか簡単に予想がつくぞ。

「どうせ酒屋だろう。既に詠から聞いているぞ、霞は事ある毎に酒を求めるとな」

警邏中だと言うのに、道草を食うわけにはいかん。
それに、俺が元居た洛陽とは街並みが全て同じとは限らんのだ。
案内役は必要だ。

「ぶーぶー、呂丁のいーけーずー」

「いけずでも生け簀でも構わん。行くぞ」

というか、いけずなんて言葉どこで聞いたんだ霞は。
……ん？
俺も聞いたことはない気がする。
……いけず……。
…？？？

「嫌やー！　酒酒酒ー！！」

俺が強引に行こうとするのを見るや否や、霞はその場で駄々をこね始めた。
…子供か！

「ふぅ……さて」

仕方なく、背中に掛けていた無双方天戟を手に持つ。
刃が陽の光を跳ね返し、その鋭利さを際立たせている。

「ひぃ！　が、頑張って案内させていただきます！」

それを見て、直ぐ様霞は頭を下げた。
うむ、分かればよろしい。
最初から素直になれば良いものを。

「よし、行くぞ」

「うぅ…鬼やぁ……グスッ」

嘘泣きをしても何も変わらん。
元より、俺は『鬼神』と呼ばれていた。
言われるまでもない――俺は最初から鬼なんだよ、霞。

ある程度、街中を歩き回り、街の外への門の近くで止まる。

「ん、大分見て回ったんちゃう？」

「ふむ、こんなものか」

大体の街の構造などは把握した。
大元は変わらんが、細部に異なる箇所を幾つか見かけた。

「んじゃ、今度こそ酒や～♪　行くで呂丁っ！」

「霞……お前はそれしか言えないのか。まぁいい、それだけ済ませて城に――――む？」

今、悲鳴のような声が……。
何かあったのか？
どうやら、霞は気付いていない様子だ。

「どしたん、呂丁？」

「いや、今声がな…」

霞に説明しようとしたところに、その原因が現れた。

「ひったくりがあっちに向かったぞ！」

見れば、麻袋を持った男がこちらに向かってきている。

なるほど…ひったくり、か。

珍しい光景でもないが…。折角、俺の気分も良かったものを、そこに水を刺されるのは気に食わん。

それに、優しい月が治めるこの街に、こんな羽虫が入り込むのも。

「よっしゃ、ウチが捕まえ――――、」

「俺が行こう」

霞には悪いが、ここは俺に譲って貰う。

…丸くなったと思っていたが、まだ俺にもこうして熱くなる気持ちが残っていたのだな。

――だが、悪くない。

戦場を幾度も駆けたあの頃とはまた違う。

どこか暖かい、何かが胸に灯っていた。

「……」

ん……まぁ、霞が何か言いたそうにこちらを睨んでいるが、そんなことは無視だ。

今の俺の決意は固いのだ。

「うおらぁぁ退きやがれ！　死にてえのかぁ！　むしろ死ねェェェ！！！」

男は叫びながら片手で剣を引き抜く。
動きが遅い。構えも成っていない。
……この程度ならば、まだ黄巾の賊の方が動きはマシだ。
しかし、死ねとは随分な言い草だ。

「ふん…お前がな」

突き出された剣を左手で叩き落とし、右手で頭を掴む。
宙ぶらりんになった男は苦しそうにもがいた。

「うが……が…！」

頭に食い込む指が激痛を伴うのだろう。
顔が激しく歪んでいた。

「さて、申し開きがあるなら聞いてやらんこともないが、どうする？」

「た……たず…ぃぃ……！！」

……助けて、とでも言いたかったのだろうが、生憎、今の俺は敵には容赦をしない修羅なのでな。

「そうか、今すぐ裁きを、か。お前が望むならば仕方在るまい」

「……！！！　……！！」

男は声にならない叫びを上げる。
当然、そんなことは一言も言っていないのだが、俺は一切の容赦はしない。

「ちょ、呂丁…！　やり過ぎや、衛兵に渡すだけでええねんで！」

霞が止めるように促す。
俺はそれを一瞥し、再び男に目を向ける。

「楽にしてやる」

頭を掴む指に、一層力を込める。
頭蓋骨の軋む音がし、男の頭を容易く砕い――――――

「呂丁ッッ！！！」

霞の声に我に帰る。
周りを見れば、街の人々が立ち止まり、この騒ぎの行く末を見守っていた。
直に衛兵も来るのだろう。
…これ以上騒ぎを大きくする訳には、いかんか。

「……分かった。喜べ、お前はこれで生き延びれるぞ。霞に感謝するんだな……」

掴んでいた頭を離す。
そのまま地に倒れた男を、騒ぎを聞きつけた衛兵が引っ立てていった。

「さてみんな、一件落着や。撤収撤収ー」
霞の言葉に、街の人々は解散していった。
その場に残ったのは、俺と霞の二人。

「……はぁ、呂丁？」

大きくため息を吐く霞。
言いたいことは分かる。
やり過ぎだ、と言いたいんだろう。
俺もそう感じてはいる。
だが……俺はあの瞬間、冷静さを完全に欠いていた。
胸にあった灯すら、黒いモノに覆われていく感覚。

――――俺は、俺の悪意に負けた。

かつての俺そのものだった『暴』たる俺。
それこそが、俺が未だに捨て切れていない俺自身の悪意。

霞の…俺を見る真っ直ぐな瞳が、眩しかった。
そして、俺にはそれが眩しすぎて……、俺自身の悪意も、全てが曝されているようで…、見ていられなかった。
俺は、まるで逃げるようにその場を後にした。

「っく――――今度こそ、城に戻るぞ…」

「……無視かい。まぁええわ…」

霞も後ろから着いてくる。

済まない……霞。
俺がいつか、俺自身を本当の意味で卸すことが出来た時。
その時…必ずお前に償うことを、ここに誓おう。

――――――――――――――――――――――――

皆が寝静まっている頃、俺は一人で城壁にいた。
傍らには酒。
……月見酒だ。

俺が今ここにいる目的。
酒を飲みながら、それを思い返す。

――――貂蝉（筋肉達磨）の言う、魏にいるヤツのご主人様とやらを救う。

今思い返せば、ヤツからはそのご主人様とやらの詳細を全く聞いていない。
そんな状況で、どう救えと言うのか…。
だが、救わない限り、ヤツは俺を元の場所へ帰さないのではないか？

「……」

…有り得る。

しかし、それは困る。
俺は必ず帰り……再び貂蝉と会う。
否――――会わなければならない。
つまり、俺は何としてでもご主人様とやらを救わねばならないのだ。

だが……俺は、弱い。
今回の件で思い知った。
力は誰にも負けない自信がある。
それは、今までも自他共に認められて来たことであるし、これからもそうであるという絶対的な自信と、自負がある。
それでも――――俺は心が弱いのだ。
ああもあっさりと心の闇に自身を明け渡してしまうようでは、俺は何も救えない。

だからこそ、俺は自身に打ち勝つ。
そして今度こそ俺は――――武の頂へ至る。
力だけでなく、心も、俺は最強になる。

そう決意し、杯に少しだけ残っていた酒を一気に煽る。
……まだ徳利の酒は残っている。
だが、今夜はこれまでにしておこう。
そうして、立ち上がろうとした時、背後に人の気配。

「誰だ！？」

「へぅ……呂丁、さん」

振り向いた先には、少々怯えた様子の月の姿があった。
……何故ここに？
疑問は、すぐに口を吐いて出た。

「月、何故ここにいる？　眠ったのではないのか？」
「えと……眠れなくて、外に出たら呂丁さんがいて…」
なるほど。
別に、何か話があるとかではないのか。
彼女は嘘を吐くような人物ではない。
信じてもいいのだろう。
「あの、お隣…良いですか？」
「ん、ああ」
本当は、もう部屋に行くつもりだったが、ここで月と話をするのも良いかも知れん。
快く隣を許した。
「へぅ…失礼します」
「そこまで畏まらなくてもいいんだぞ。むしろ、月が俺の主なんだ、もっと堂々とした方がいい」
まぁ、あの豚のように堂々とし過ぎても困るが。
というか「へぅ…」とはなんなんだ。
「私、こんな性格ですから…。それに、皆さんの主なんて言っても、私は何も出来ないし……迷惑かけてばかりです」
……月は、今の自分に良い感情は持っていないのだろう。

出来れば、変えたいとも思っている。
だが、その性格故、変えようにも中々変えられないのだ。
いや…元より、人は誰しも今までの環境の中で構成されて来た自分の性格を変える、ということはそう簡単に出来るものじゃない。
月だから難しい、という訳ではないのだ。
しかし、それは諦めて良いという理由にはならない。
確かに、自分を変えるというのは難しいだろう。
それでも、誰もが変えられる可能性と強さを持っているはずだ。
何せ、俺自身が自分を変えようとしているのだからな――――。

「月、迷惑というのは、かけてはいけないものじゃない。
迷惑をかけて、かけられて、そしてお互いを許し合うものなんだ。
華雄も、霞も、ねねも、恋も、詠も、もちろん俺も、な。それに、だ。俺達はお前に着いていっているんだ。誰も迷惑に思わんさ」

「呂丁、さん……。ありがとう、ございます…」

両手で顔を抑え、涙を流す月。
こういうのは俺の柄ではない、が……。
今だけは、構わんだろう。
月の頭に手を乗せ、優しく撫でてやる。

「何かあるなら、迷わず頼れ。
俺は…いや、俺達は――――その為にここにいる」

そう。
確かに、ヤツに頼まれたことも、俺がこの世界に来た理由でもある。
だが…今この時、この瞬間は、隣にいる少し頼りない主を守る為にいる。

それが、どれだけの敵を作ることになろうとも……。

「呂丁さん……う、うぅ……」

そうして、月の頭を撫でている内に、彼女になら、俺の正体を明かしても良いのではと思った。
月は良くも悪くも優しい。
だからこそ、それは決して味方を裏切るようなことはしないという証明にもなる。
いや、違う……。
正体を明かしていいと思ったんじゃない。
彼女ならば、主として俺の全てを預けても良いと感じたんだ。
男としての全ては貂蝉に。
武人としての全ては、月に――――。

「月…」

「呂丁さん…？」

「これは、何時か話すかも知れないが、今は他の皆には秘密にしておいて欲しい。月になら、話せる」

そして俺は、知り得る全てを月に話した。
この世界が外史と呼ばれる、並行世界の一種であること。
俺が、外の世界での『呂布』であること。
そこでは、殆どの将が男で、性格も全く違うこと。
黄巾の乱が収まった後、袁紹によって『反董卓連合』が作られること。
恐らく、反董卓連合が作られるのは間違いないだろうが、その先は

どうなるかは分からない。
負けるつもりはないが…、勝った後も、俺が歩んだ道になるとも限らない。
だから、その先については正直に分からないと話した。

「そうですか……やっぱり、呂布さんだったんですね」

「――――！　気付いていたのか？」

「何となくですけど…。雰囲気とか、強さとか、恋さんにそっくりだなって。多分、恋さんも薄々は気付いてるんじゃないかと思います」

「……」

驚いた。
確信を得ていなかったとは言え、雰囲気から俺の正体を看破していたとは。
もしかしたら月は、武や知に精通していなくとも、人の心に触れ、読むことについては他の追随を許さない程なのではないか。

「えへへ、私と呂布さん…あっ、呂丁さんだけの秘密ですね」

そう言って、はにかむように笑う月は愛らしかった。
気付けば、頭に乗せていた手を、月の手の上に移していた。
月も、もう片方の手でそれを握り返す。
夜の空気に触れて、冷えてしまっていたが…何故かその手は暖かく感じた。

「そうだな…二人だけの、秘密だ」

暗い夜の中、俺達は空を見上げる。
そこには、何も欠けていない美しい満月があり、それはまるで、俺達を見守るようにただ佇んでいた――――。

奉聖（仮）、己の内を知り、明かすのこと（後書き）

――――それは、嘘のようで、だけれど、真実のようで――――――

「駄目ぇ――――――！！　呂丁――――――っっ！！！！」

「ウチらには……何も出来ひんのや……！！」

運命が彼を弄んだように――――

「お前はッ、二人を破ったのだろう！？　そのお前が、何故諦めるッ！！！」

「恋殿は任せたのですぞ。泣かせたら……承知しませんぞ」

時代は、彼女たちを弄ぶ――――

「恋と呂丁なら、何でも出来る」

「必ず、必ず帰ってきて下さいね――――――“呂布”さん」

「俺は……誰だ？」

己の内も外も、何もかもが砕けた音がした――――――

案「なにこれ」

奉聖（仮）、武を天下に知らしめるのこと（前書き）

「これは、ほんの挨拶だぜ！」

「挨拶はお返ししなくちゃなぁッ！」

ドーンドパーン

「あ、挨拶がぶつかって相殺された…！？ま、まさに相殺（あいさつ）！！」

そんな電波を受信しました、案です。
出来れば先月の内に更新したかったんですけど、そんな暇はありませんでした。
こう、ね！歳末バーゲンセール的な何かがね！

ゴメンナサイ、モンハンやってました。
だ、だってようやくＰＳＰ買えたんだもん！
モンハンも高騰してた中定価で買えたんだもん！
そりゃあやるでしょうよ！
かぁー！
そのおかげで今はすっかり炭鉱夫。
ｔ５ｋ９のお守りは今もみんなの胸の中。
私の孫に上げるのもヴェルタースオリジナル。
何故なら彼もまた特別な存在だからです。

どうしてこうなった。

取りあえず嘘予告は面倒になったんで前回の一回だけで終了。

アニメの予告考える人すげー。

奉聖（仮）、武を天下に知らしめるのこと

月に、自身の知りうる全てを話した。
返ってきた言葉は拒絶ではなかった。
それどころか、薄々気付いていたという。
意外だ、と思うと同時に、この少女を信じて良かったと。
素直にそう思えたのだった。
だが、月が信じてくれたとは言え、突拍子もない話であることに変わりはない。
月にも、これまで通り呂丁と呼んで貰い、周りにもこのことは隠しておこうと言っておいた。
いつか皆に話せる時まで。

そんな会話をしたのが三日前。
特にこれといった騒ぎもなく、文字通り平々凡々。
今日は鍛錬でもしようか、恋と相手するのも良いかも知れない。
そんなことを考えながら、慣れたように黒い鎧を着込む。
さて、行くか。天気も良い。うむ、とても平和な一日に――

「呂丁様、玉座で皆様がお待ちですわ」

――なりそうにもないな…。
風花からの言葉に、面倒事が起こる予感がした。

「――――近くに黄巾党が？」

「そうよ。…全く、せっかくの月の街が汚されるわ」

質問に答えた詠は辟易した様子で、はぁ、と大きく溜め息を吐いた。
将が全員玉座に呼ばれ、何の話なのかと思えば、ここ洛陽に黄巾の奴らがかなりの数を率いて向かっているらしい。
その数、凡そ三万。
やはり面倒事だったか…。
大方、大きな街だから盗める物も多いと踏んだのだろうが……。
幸い、今はこちらの将兵で遠征している者はいない。
問題なく迎え撃てるだろう。

「それで、誰が出るんや？　全員っちゅう訳やないやろ」

霞がそう問う。
確かに、全員で守れば被害も少ないだろうとは思う。
だが、それはあくまで黄巾党を相手にしていればの話だ。
防衛している間に、他の軍に来られれば危険だろう。
その為、三割程度の兵力は城に残しておくべきだ。

「それについてももう決めてあるわ。恋、ねね。それと呂丁。…お願いね」

「――――なに？」

「ん」

「任せるのですぞ！　ねねと恋殿が居れば一騎当千。いや、一騎当万ですぞっ！！」

ねねが鼻息をふんすふんすと鳴らして息巻いているが、こちらは別

の思考を広げていた。
三割どころの話ではなかった。
最大戦力であろう俺と恋が出るとは言え、残る数、そして敵の数に比べると明らかに少数だ。

「詠、大丈夫なのか？　相手は賊徒と言えど数は三万。厳しいやも知れんぞ」

かつての俺も、単騎で多数を相手取ることはあったが、多くて数千程度。
流石に、これほどの数は相手にしたことはなかった。
俺の問いに、詠は何故か少し顔を赤くして答えた。

「そ、それは三人を信じてるからよっ！　そりゃあ、呂丁はまだ日も浅いし、人と成りも良く分かってないけど……武は本物だし、月のことも助けてくれたし……ゴニョゴニョ」

「ふふ…詠ちゃんったら」

「と、とにかく信じてるのよっ！！　つべこべ言わないの！！」

最後の方は良く聞こえなかったが、隣の月が優しい笑みを浮かべている辺り、悪いことは言っていないのだろう。
相変わらず顔は赤いが、信じてくれているのは純粋に嬉しく思う。
そんな詠のお陰か、不安感もなくなった。
ありがとう、詠。
後は――その信頼に応えるとしよう。

さて賊共、俺に僅かでも揺らぎを与えた代償……高く付くぞ。
貴様らに出来ることは唯一つ。

俺の刃の錆と成れ。

―――――――――――――――――――――――――――――

広い、広い荒野に俺たちはいた。
眼前には視界いっぱいに広がる黄色。
全て敵兵、賊だ。
これは…多すぎて少々気色が悪い。
さっさと潰すとしよう。
傍らにいるねねに声をかける。

「どうする」

「恋殿は右側から、呂丁は左側から交戦するのです。我々は正面から当たりますぞ」

「ん」

「……そんな簡単で良いのか？」

それでは正面の部隊が危険ではないのか。
その問いに、ねねは少しだけ頬を染める。

「…ねねも、お二人を信じてますから…。

――っ！　さ、さっさと片付けて、ねねたちと合流してくだされ！」

気恥ずかしそうに放たれたその言葉に、思わず面食らってしまった。
珍しくお淑やかかと思えば、真っ赤になっていつもの調子に戻った。
――信じている、か。

「……ふん、分かった。すぐに済ませてやる」

元よりそのつもりだったが、余計に手を抜けなくなったな。
当然、強襲を使わせて貰う。
早いとこ終わらせたいのでな。

「行くぞ、恋」

「…ん」

俺と恋、二人で左右に駆け出す。
手にはそれぞれの愛戟。
何やら賊共が騒いでいるが知ったことか。
さぁ、戦闘開始だ――――！！

斬る、弾く、裂く、飛ぶ。
それはまるで嵐のようだった。
戟を振るう度、賊の身体の何処かが欠けていく。
武器を盾にしようとも無意味。
柵を建てても台風がそれを紙の如く吹き飛ばすように。
それ程迄に、その剣戟は激しかった。

「ば、化け物ぉ！」

「こっちに来るなァ！」

そうして敵は理解する。
否、本能が訴える。
コレは、決して相手してはならないモノだったのだと。

「俺が化け物…？　違うな、俺は鬼だ。鬼神と恐れられしこの力、刮目しろッ！！
ううおおおおおおおおおおッッ！！！！」

「うわぁぁぁっ！！？」

斬る、弾く、裂く、飛ぶ。
まるで、などという言葉は不要。
それは、嵐だった。

「退けぇッ！！」

彼の身体が眩く輝き、それは圧倒的な力に変わった。
――――――真・無双乱舞。
かつて彼がいた地にて、名実ある将たちが使っていた奥義。
敵を穿ち、討つ為の業（わざ）。
それは一瞬の軌跡の後、数十人という賊を大地に還した。
しかし、乱舞はまだ終わってはいない。
再び振るわれるその刃に、一人、また一人とその命を散らしていく。
そうして更にまた一人。
既にどれほどの賊が逝っただろうか。

彼の通った跡には、少なく見積もっても千は超えるであろう屍の山。
賊たちにとって、その光景は地獄でしかなかった。

「そこを……退けえええぇぇぇぇッッ！！！」

――――咆哮。
瞬間、彼を中心に砂煙が舞った。
世界のあらゆる音が消える。
それから遅れて、大岩が落ちたかのような音が響き、砂煙が晴れていく。
……そこにいたのは、彼、一人。
生きているのも、そして、“ヒトの形を成している”のも、彼唯一人だった。
地には赤、赤、赤。
賊“だった”モノの、肉片が転がっているだけだった。
肉片になる前に、とある敵兵は言った。

天下無双、と。

鬼神の誇る無双の武によって、左側の敵は壊滅した――――

ねねの元へ向かう。
ええい、敵が多い…！
一歩進むだけでも十人は吹き飛ばさなければ進めない。

「邪魔だ！」

真正面の奴の首を掻き斬る。

腕を振るっている間に、別の方向の敵を蹴り飛ばし、強引に道を作る。
場所が開けた…！
ねねと、そこに剣を向ける男を見つける。
させるか！
そいつの上半身と下半身を永遠に離れ離れにしようとした瞬間。
その男の身体は縦に二つに割れた。
そこに俺の戟が入り、男は四分割という形になった。
縦に斬ったのは恋だった。
俺と同じ考えの元、敵を殲滅しながらここへ向かっていたのだろう。

「恋殿〜！」

ひしっと音が出そうな程強く恋に抱き付くねね。
……相変わらず仲が良いな。

「さて、恋。後片付けの時間だ」

「ん。…ねね、離れる」

「恋殿〜……」

名残惜しそうに恋から離れていくねね。
仲が良いというか、依存しているのではないかと思ってしまうのは仕方在るまい。

「よし、行くぞ！」

再度、恋と二人で敵に突っ込む。
敵たちが悲鳴を上げるが、そんなもの知ったことか――

結論から言えば、俺たちの勝利だった。
味方の被害は極めて少なかった。
死者五名、怪我人二十名。
それに対し、敵兵たちは全滅。
ねねは前代未聞の戦だと評した。
賊とは言え、三万を相手に、千にも満たない部隊で被害も少なく勝利したのだ。
味方からの評価は高まるだろうし……同時に、それぞれの諸侯や民への風評に繋がっていく。
今回の戦いで、我々の勢力が強力であることを認識したはずだ。

「やはり流石ですぞ恋殿ー！」

ねねが恋に抱き付く。
……またか。
そして毎度のことながら俺は無視なのか。

「…邪魔」

歩きづらいのか、恋はねねを腕の力だけで投げ飛ばした。
美しい放物線を描いていくねね…。

「あべしっ」

地面に落ちた。

何処ぞの世紀末っぽいナニカを感じたが、それを気にしてはいけない気がする。

しかし、頭から落ちた割にぴんぴんしているな…。

単純に丈夫なのか、それとも『義矢倶穂瀬射』なる秘技を身に付けているのか。

永遠の謎である。

「い、痛いですぞっ！」

戻って来た途端にぷりぷりと怒るねね。

……俺に。

何故に。

「知らん。帰るぞ」

相手にすると面倒な為、さっさと切り上げることにする。

「むきー！」

後ろが喧しいが無視だ、無視。

…ムキになる、とは「むきー！」から来ているのだろうか？

不意に沸いた疑問を帰りの暇潰しにすることにした。

「ねね、行く」

「あぁ、恋殿～。ハァハァ！」

危険な雰囲気も感じるが無視だ、無視！

奉聖（仮）、武を天下に知らしめるのこと（後書き）

好きな肉は
鶏＞豚＞牛＞その他
です。
あ、でもラム肉は美味しかったなぁ。
臭みもあんまりないんですよ。
まだ子供の肉だからですかね。

二次創作じゃなくてオリジナルのハーレム物が書きたい。
唐突に何だと言われても云々。
これ更新したら着手しましゅ、うひひー。

俺が、俺たちが、サンタムだ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1453p/

武の高み、頂を求めて

2011年10月8日10時21分発行